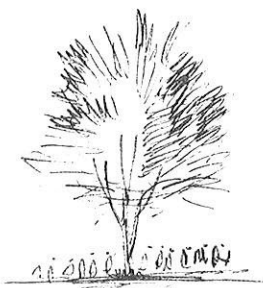


光の子



No. 77 1998. 3. 1.

● 希望に満たされて（ローマの信徒への手紙第15章13節）



「花の中で」

え・中島英子

「春風」

花種の袋を振って母を呼ぶ

落ち椿くろぐろとして重なれり

鳥帰る胸のうちより羽ひろげ

校歌また春風のごとききにけり

春すでに礁を波の押し上げて

夢殿を滑りし恋の雀たち

雛の夜の手毬ひとつを卓の上

伊藤 通明（『白桃』主宰）

新しい契約

ルカによる福音書 22. 20

食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。

この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。

理事長 福島 勲

キリスト教会では名の通ったさる牧師が、伝道集会で自分は毎朝多量に水を飲む、みなさんも飲むとよいと話された。胃腸の弱い私は、胃液が薄まりはしないかと素人判断しながら聞いていた。近頃年のせいかな、あるいは住んでいる所が乾燥するためか、よくお茶を飲む。

先年物置小屋の組立に来た若い男にお茶をすすめたら、この辺（長野県下）の人はすぐお茶をというが、飲みたくない、とぶつきらばうに答えた。ではコーヒーは、というと、それなら貰うといった。

インスタントでもコーヒーはコーヒーだ。カントは毎朝決まって六十四粒のコーヒード豆をひいて飲んだ。決まって六十四粒というのはいかにもカントらしい。

お茶でもコーヒードでも種類や飲み方は色々あり好き好きである。

お茶の歴史は古いのだろう。

京都の有名な茶舗一保堂の包装紙はりっぱな和紙で、これに茶経巻上の初めの部分が印刷されている。

唐の時代の人の書いた者で、「茶は南方の嘉木である」ではじまる。

喫茶の紀元は中国で、右の本より四百年も早い三世紀半ばに、喫茶の具体的なことを書いた本があるそうだ。

仏教の伝来と共に日本にも茶が入ってきて、僧や上流階級の人々がたしなんだ。

安土桃山時代に千利休によって茶道の一派が立てられる。大名たちも茶をたしなみ茶道具に凝って競った。

中国の茶器が重宝がられ、呂宋島（フィリピン）辺りから買い入れた物のが、中国人の便器であったといった愚にもつかぬ話を読んだことがあるが、天目の茶碗など大名たちの垂涎の的であった。

伊達政宗が天目の茶碗を手に入れて、悦に入って眺めているうちに、ひょいと取り落としそうになり肝を冷やした。しばらくして正宗は、この高価な茶碗を庭石に投げつけて破ってしまった。このようなことで心の動揺を来した自分を恥じ、自戒したとのことである。

茶道の作法はキリスト教の聖餐式にその源があるという人がいる。

聖餐式というのは、イエスが最後の晩餐で弟子たちにパンとブドウ酒を与えられて、これは私の体であり、血である。飲食ごとに自分をおぼえよと仰せられた。

これに従って行う礼典で、十字架で裂かれた肉、流された血を象徴し、単的にキリスト教の神髄をあらわす儀式である。キリストを信じる者に

は罪の赦し救いの新しい契約の確証であるが、信じない者にとっては何の変哲もないものであろう。

茶道にあっても、心なきものにやたらとお茶を点てることは憤み、強いて言えば邪道であろう。

橋立の茶も床しとも思すなよ
泥水なれば飲まれざりけれと詠んだのは利休である。

秀吉が天正八年小田原を攻めた。従軍していた利休に、男山八幡宮の社僧滝本坊実乗が陣中見舞を出し、帰洛されたら、一服立てて欲しいと乞うた手紙に答えたものである。利休にとってこの北條氏処刑の悲劇は哀れで、お茶どころのさわざではなかった。

橋立（利休愛用の茶器名）で茶の湯を点てても、泥水にも似てとても味わるものではないというのである。（小松茂美著、利休の死、中公文庫）

今日の教会での聖餐が、来会の未信者に気兼ねしたりして、まるで礼拝の付録か添えもののようにそくさと執り行われたり、それにあずかろうが与るまいが何の痛痒も感じないといったことでは、信仰の本義を弁えないこと甚だしい。受難週も復活節も真に意義深く迎えることは出来たものではあるまい。

エッセイ

或る画家のこと

田中一村という画家がいた。明治の末頃から昭和五〇年代まで生きた日本画の天才だそうである。私にとっては懐かしい名前である。

私は、この二月八日の日曜日、NHKテレビでばんやりと昼のニュースを見ていた。オリンピックに関連した話題がつづく中で、田中一村という名前が出てきた。はっとした。

ニュースによれば、田中一村の誕生の地栃木市の市民会館で、一村の襖絵を中心にした展覧会をやっているという。しかも明日までである。私は何が何でも行って見たいと思った。

実は、昭和五十九年の一月十二日（土）夜の十一時頃から放映された田中一村を見たのである。その時初めて知った一村という人の名と作品と生き方に大変感動した記憶があるものだから、もう一度、今度は自分の目で一村の絵の実物を確かめてみたかったのである。

私は家内と一緒に、急いで食事を済ませて高速道路で栃木に向かった。市の中心街は、広々としてきれいな通りであった。蔵の街というイメージを感じさせる建物が、あちこちに

あった。そして、観光客らしい人たちも、何組も見られた。文化会館に向かつて横道に入ると、何となく一村の絵を見た帰りと思われる人に出会った。展覧会のチラシをみんな持っているのである。

或る程度私の予感はずれた。会場の近くは、すでに車が並んでいるのである。やつとの事で駐車場に入った。砂利道のスロープをのぼって会場に入ると、人、人、人である。余り広くない部屋に、多すぎる人。

「テレビで放送したから混んでるのね。」という人がいた。会場の中でも、不満そうにそう言う人に会った。私もテレビに釣られてやって来て、混雑を引き起こす原因を作っている一人ではある。

田中一村の襖絵は見事であった。日本の美術史の流れの中でどうのこのの、というのは全くわからないが、一点一点に、作者の人間性が表れている様である。みんなていねいに見えるものだから、自分の意志通りには動けない。ビデオ放映の部屋をのぞいてみると、もう一杯の人で画面が見えない。諦めて通り過ぎない

わけにはいかなかった。

それにしても、この現象は何なのだろう。すべての人がそうというのでもないだろうが、テレビでの情報によって、わんさと人が寄って来る。今更ながらテレビの持つ力の大きさを思うのである。

田中一村という画家は、晩年を奄美大島で過ごした。小さなトタン屋根の家に住み、病気を持ちながら、近くの工場で働きもした。奄美大島での作品は、やはりある覚悟があったらしく、以前の作品より素晴らし。しかし、その画家も、とうとう貧窮の中で亡くなったという。

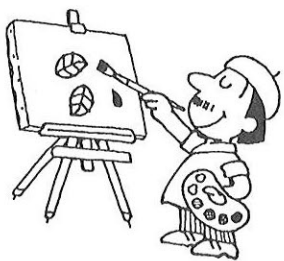
画家が悪戦苦闘している時に、誰もその天才に気づかなかったのだらうか。誰も関心を示さなかったのだらうか。ただの貧乏画家にすぎない存在と見られていたのだらうか。作品に捺された一村の落款は、飢餓我というのだそうである。飢えが私を絵に駆り立てるとい意味であらう。何と悲しい、凄いきき方だろう。

田中一村は多分昭和五十二年頃亡くなっているのだが、五十九年にNHKでこの画家を取り上げ紹介した。

彫刻家 中島 睦雄

そのことによって爆発的に有名になっていくわけである。しかし、この放送までの経緯は何だったのだろうか。その頃まで全く無名だったのだろうか。若しそうだとしたら、埋もれていた死後の天才を、誰が発見し、発掘したのだろうか。もっと早くそれは出来なかったのだろうか。画家に対する現在の人気や理解や讃嘆の百分の一でも、生前に捧げることはできなかったのだろうか。似た様ないくつかの例が示すように、人間というものは、いつの世に於いても極めて気まぐれなものなのかも知れない。

会場の壁に掛けられた画家の、爽やかな表情の写真をみると、その死後になって慌てて大騒ぎをしている私たちが、何ともみすばらしいものに思えてならないのである。



電話が鳴った。K先生と小生以外に研究室には誰もいないことは、二人ともよく知っている。まず二人ともお互いに気づかれないように、電話のある場所からなるべく遠ざかるように逃げる。しばらく二人とも相手が出ることを祈りながら、ややしばらく、じつと息

を殺して機をうかがう。いつまでもベルは鳴り続ける。根負けした方が電話に出る。その時は小生が負けて電話に出た。

K先生と奥さん

山形大学医学部教授

仙道 富士郎

学者もどきのつづやき ③

「ハロー」。遠い、遠い三〇年近くも昔、二人が米国の国立保健研究所に留学していた時の話である。相手「ABCDE..」、小生「[Pardon me]（もう一度お話をさう）相手「[XYZ..」、小生「[Pardon me]」....、これを何回も繰り返している内に相手は諦め、笑いながら「OK」と言う。何と辛いことよ。二人とも電話が恐ろしくて仕方ないのである。私たちだけではない。米国に来て

何年も経っていない人は皆、電話が恐ろしいのである。

笑えない話がある。愚妻と小生が渡米して間もなく、子どもたちのベッドを買い求め、アパートへの配達を依頼した時のことである。愚妻はボス（日本人）の奥さんに「よく押し売りの電話がかかってくるから、とにかく「NO」「NO」と言うように」との指示を受けていた。電話が鳴った。「NO」「NO」....。

後で判ったのだが、ベッドを購入した店の人が、いつ品物を届けたらいいか電話したのだそうである。相手はとても困ったということである。（しかし、いま気づいたのだが、この話少しおかしい。どうしてこんな複雑な状況を、のちに彼女が英語で理解することが出来たのか？愚妻に聞いたとしても私たちが留学生生活は、こんなとんちんかん話が続いた。

K先生の奥さんは、小さい坊やを連れて先生に連れてやってきたが、お腹が大きくなってまた日本に帰ってしまったので、米国での奥さんのことはほとんど記憶にない。

んが出てきてくれた。話題はほとんど、アメリカの思い出話と、お互いの子どもたちのことである。

それにしても、何ともK先生の奥さんが元氣なのである。奥さんが少し遅れて到着するまでの間にK先生から聞いたところによると、二人の息子さんが家を出られてから彼女は俄然フアイトを燃やし出し、現在では中学校のコンサルタントとして活躍しているとのことである。時々学校に出かけて行つては、中学生の悩みを聞いてあげる仕事とのこと、話を聞いただけでエネルギーを消費して、ぐったりなってしまうような仕事ではある。

遅れてきた彼女は「今日はクラブ活動をしている女の子の部担当の先生に対する愚痴を聞いている内に、込み入った話になってしまつて...」少しの疲れも見せず、微笑みながら遅れたわけを話された。

月に一回位は東京に講習会に出かけるとのこと（K先生の話）。そんな時K先生はJR東日本の土・日フリー切符を持たされて、どこかに遊びに行くようにと言われるのとこと。

2つの文化に生きる

11

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

宗教改革者ルターが、「たとえ明日が世界の終わりであっても、今日私はりんごの木を植える」と言ったそう。何で明日世界が終わっちゃうのにわざわざりんごの木を植えるきやなんなの？時間の無駄じゃないの？」なんて言葉が返ってきた。確かに今日植えたりんごの木に明日すぐ、りんごの実がなるはずがないし、木を植えるという作業はけっこう体力と時間のかかるものだし、本と、時間の無駄のような気がする。気持ちも分らないでもない。

我が家は、夕食はだいたいいつも家族みんなでいただく。最近その夕食での話がかなり賑やかになってきて、次は私がしゃべる番だの、話しているのに横から割り込んだだの、

食事はとづくに終わっているのに座ったまま話に夢中になることも度々ある。ある日、このルターの話をもんなにしてみた。「ねえ、ルターさんという偉い人が、もしもあした世界が終わっちゃうとしても今日りんごの木を植えるって言ったんだけど、どう思う？」小五の娘、「うーん、わかんない。」となぜか悲しそうな顔。どうも「世界が終わっちゃう」というところがいやだったようだ。中二の息子、「うーん、まあ、その人がその時しなければならぬこととで、その上したいことがりんごの木を植えることなのなら、それでいいんじゃないの。」と、かなり理屈の通った高度な答えが返ってきた。夫、「まあ、りんごの木は植えておくと、世界の終わりまでの一日間、その緑を見て楽しめるからいいと思うよ。」かなり暢気で現実的な答えだ。私、「じゃあ、ほんとうにあした世界の終わりだったらどうする？」娘、「きょう、遊園地へ行く。あと、世界が終わりで爆発するときは苦しまないで終わりにする方がいい。空気みたいにはつとなくなるのいいな。わたし苦しむのイヤだから。」やっぱり、終わりとか死とかの恐怖の方が先のような。それから、娘がいま一番したいことは遊園地で楽しく遊

ぶことなんだと、その時あらためて発見した。息子、「だいたい地球の終わりなんて突然来るものじゃないの？現実にはありえないよ。まあもし、あったとしたら何かやり残したことをやると思うけど、そんなこと起こらないと思うからばくは考えないようにする。」と、うまく理屈で逃げられてしまった。

夫、「うーん最後の日ね、多分ものごとを否定的な見方をしないで『愛』を持って一日過ごすと思うよ。でも表面的にはいつもしていることと変わらなくていいと思うけど。」（さすが！宣教師生活一八年。理想は高い！）

何をするだろうと、ふと考えてみた。読み残した聖書の場所を読みあさるかな？それともじつと世界の終わりを待つのだろうか？いや、やっぱりしなければならないこと、したいことを一日中するだろう。そして、子どもたちに「生まれてきてくれてありがとう。」夫に「結婚生活ありがとう。」両親や姉妹にも「色々ありがとう。」友だちにも「友だちでいてくれてありがとう」と心の中は感謝で一杯になるだろう。

翌朝、起きたときの子どものたちの顔がなぜか、輝いて見えて、いとおしく思えた。夫もなぜか穏やかな顔つきだ。ルターさんの一言でこんなにも世界が違って見えるのはすごいことだなと思った。ルターさん、どうもありがとう。今日も新しい一日が始まる。感謝。



十時には軽井沢に到着してしまつた。K先生は何とも楽しげに語られるのである。婦唱夫随の像をここに見る思いである。私にはこれまであまり見えてこなかったK先生のユーモアのある温かさがとても素敵に感じられ、また米国でお付き合ひした頃はとても想像だに出来なかった奥様のバイタリテイにも感じ入った。まだまだ話したいのに山形行きの電車の時間が来てしまい、二人を残して中座せざるを得なかったのが何とも残念でならない。

プリズム

原田家日記

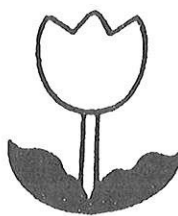
一月三十一日 自転車を押し戻す向かい風。周りに景色が黒々としたシルエットになる頃、私は、休みの一日を終え、「家」にもどる。子どもたちは、毎日こんな寒さと疲労の中、帰ってくるのか。とうとうこののを諦め、自転車を押しながら、子どもの顔を思い浮かべる。

中学入学から二年。笑顔、明るさがキャッチコピーのようだった多歌声の顔にくもりを感じ始めたのはいつ頃からだっただろう。一生懸命やっても追いつかない。勉強も、そして人との関係も。分かっていることは、私だったらとくに逃げ出している状況に、一人で立ち向かっているということだ。「今日楽しかった」そんな日の話は、うれしさを伝染させる。せめてまた明日からがんばれる。多歌声のすごいエネルギーをあたためられる手伝いしようと思う。

二月六日 夜中、荒い息づかいに目覚める。私に触れる花子の手のヒラの熱さ。三十九度。初めての発熱に

あわてる。反抗期真っ盛り、やりた放題の毎日だが、この夜は、泣き叫ぶこともほとんどなく、静かに病氣とたたかっていた。数時間後、突然「なかつた」と自分の額を指さす。三十八度あるのだが、それでもずいぶん楽になったのだろう。冷やし続けるのと歌まで唄いだす。朝一番に病院、と心づもりする。静かに寝かせておいたはずが、朝食時、いつものように、あんばんまんの枕と数冊の絵本を抱えて「おはよう」と起きてきた。そして食卓で「いったきまーす」とご飯を食べ始めた。その後二日間回復。病気をはねとばす元気な二歳。

チューリップの芽が顔を出した。それぞれが、心もからだも元気に春を迎えられることを願って、また一日を始めている。 竹花 信恵



子どもたちの季節

仙道家

庭には、柔らかな日差しを浴びてクロッカスが可愛らしい笑顔を振りまいています。

この冬もアツという間に過ぎ去りました。

雪も何度か降ったこの冬は、私にとつてとても楽しいものでした。

『雪が降って喜ぶのは子どもだけだよ』と言われても、天気予報が『明日は雪でしょう』と言えば、うきうきわくわく、一人で、ワイイ、ワイイと喜んでいました。

成人の日で休みの日も雪でした。学校が休みのこの日は例年町の子供会のカルタ大会です。

私たちの地区の子ども会は、小学校四年生以上の子どもたちで団体戦のチームを作り、個人戦のメンバーも出している。

大会の前に何度か練習も行う。三学期が始まったその日も練習があった。小学六年生の環と福子、五年生の信一、四年生の詩美と子ども会の役員をしている竹花保母が小学校体育館へ出かけました。

練習が終わって帰ってきた竹花保母から『環から何か聞いた？』実は練習の態度が悪く、役員の話は聞か

光の中で

佐藤家

少し前までは、裏の田んぼに私が乗っても割れないくらいの水が張り、登校前の小学生とスケートができたのですが、この二・三日は見るからに薄そうな氷です。やがて、それも張らなくなるでしょう。

この時期、受験生の萌季は追い込みに入っています。目の色も変わり、寸暇を惜しんでカリカリと・・・あ、笑ってる。・・・あ、寝てる・・・でも、自分で何とかバランスをとりながら懸命にプレッシャーと闘っているのだと思います。

ここでは経済的な理由もあり、高校進学を希望する場合は公立高校一本だけの受験になるので、そのプレッシャーの大きさは図り知れません。彼らと関わっていると、自分のこれまでの安易で守られた生活を思わされます。高校進学を決めた時も、彼らのように自分の置かれている状況や一人で社会に出るという現実など考えもしませんでした。

一つ一つの節目を意識し、その意

くて、団体戦は無理だから個人戦にしないと言われちゃったの。』と報告を受けました。

環からはただ『個人戦に出る』と話がありました。

カルタ大会が近づいたある日、環がニコニコと嬉しそうに帰ってきました。

『子ども会の会長さんに車で送ってもらったの。カルタ大会で去年は団体戦で頑張ったんだから今年も団体で出来ると言うよって言われたの。団体戦がんばる！』と嬉しそうに話してくれました。

ところが大会当日は『雪』。カルタ大会は行われたものの、私たちの子ども会不参加を決めました。少々残念だった環は、雪の中元気に遊んでそのことは忘れてしまったようでした。

池田 祐子

暮らしの彩り

笹山家

子どもたちがそれぞれ幼稚園や学校から帰り集まる夕食の時間はとても大切で、そして楽しい。その食卓を少しでもよく演出するための献立を考えるのが、私の仕事だ。

献立を考えるときに気をつけようと思っていることがある。先ずまっ先に考えるのが、毎日同じ様な内容

味を考え、選択していくこと、そしてその選択に責任を負うということ・・・それを伝えていくことは、彼らの心の備えをすることです。社会に出たときにできるだけ困らないような心の備え。

順調にいけば、また高校生が四名増えるはずですが。施設から社会に出るということの是非もあるでしょうが、今、目の前の子どもに良かれと思うことをするしかない私たちです。新しい年度が、寒い寒い季節の後に始まるということにも何か大きな意味を感じる今日この頃です。岩崎まり子

河のほとり

倉沢家

これまでに何人かの卒業生を送り出してきた。どの子どもも卒業時には就職をし社会に出ていつている。私も高校の三年間を担当していた子どもを二年前に社会に送り出した。陸男は大手の自動車会社に就職していった。それまでの卒業生たちはいえ、一年が過ぎる前に早くも

にならないようにすること。そして栄養。三人の子どもの顔を思い浮かべながら、好き嫌いを取り合わせる。グループの子どもたちは、料理の味がよく分かる。料理を作る人になりたいと思っている啓、お醤油の種類が変わっただけでも気がつく珠美、そして、結構食事に文句の多い美季。それぞれ良い批評家で、味にうとい私に意見をしてくれる。

そんな中で一年余り食事を担当してきて、特にうれしいこと。啓は、どんな失敗作でもおいしいと言って食べてくれる。珠美は味に敏感で好き嫌いがはっきりしているが、ここ一年で苦手なものも残さず食べるようになった。美季は嫌いなものでも鼻をつまんでのみこむ。残さない。

子どもたちのそういう一つ一つがあって、私も食事作りをイイヤでなく続けられる。仕事としての食事作り。仕事としての責任に追い立てられ、子どもたちの反応に励まされていることを思う。

笹山 恵理



現場から

光の子たちと ⑥

この冬は大利根町でもたくさん雪が降りました。

一月八日 交通機関がマヒしてしまふほどの大雪の日はいつも帰宅の遅い中高生でも早めに帰ってきました。

ひとり、ふたりといつの間にか園庭に子どもたちが集まり、雪合戦が始まりました。楽しそうなんんなの様子を見て、カメラを手に一步園庭に出ると「ドスッ」と背中雪の固まりがぶつかりました。気がつくとも私も夢中になって雪の球を作りみんなに投げ返しています。男の子たちの集中攻撃に合うと、ムキになって投げ返し、体中真っ白です。

「ワーツ」という泣き声が聞こえて振り返ると、眠たさをこらえて、庭の雪とたわむれていた小さな裕が泣いていました。私は彼をほつたらかしにして、雪合戦に夢中になっていたのですが、裕は、眠たさもあってでしようか、みんなに攻撃されている私を見て、「だめっ！だめっ！」と抗議してくれているのです。そんな眠たそうな彼を見て、やっと雪合戦をして子どもようになってい

た自分から、我に返って、戦いを退く気持ちになりました。

次の週もまた雪が降りました。

また、みんなで外で遊んでいると、同じグループの詩美が、雪の攻撃に合っていました。するとまた眠たそうな裕が、今度は詩美を思っ、「だめっ！だめっ！」と抗議していました。小さかった裕がいつの間にか、こんな思いやりのやさしい気持ちを持てるようになったのだな、と成長を感じる瞬間でした。

雪といえば、長野ではオリンピックが開催されました。たくさんメダルを取ったジャンプは、家でも話題にのぼることが多くありました。

船木選手が一つ目のメダルを取った翌日、新聞を広げてみながら「すごいね。たくさん飛ぶんだよ」と裕に話しかけました。すると、その飛んでいる船木選手の写真を指さし、「ウルトラマン」といいました。それからというもの、ジャンプを見ると「ウルトラマン！」といい、新聞を見ていると、横から「ウルトラマンは？」と、ジャンプの写真を指さします。子どもたちの胸躍る様子

を見て、ジャンプの選手をはじめ、オリンピックが与えてくれた感動は、ウルトラマンに匹敵する夢を与えてくれたのかも知れないと思いました。

この冬は雪も降りましたが、インフルエンザも大流行しました。

我が仙道家では、情けないことに、私が一番に、インフルエンザにかかってしまいました。すぐに小さな裕にうつってしまいました。受験を控えた漢子もいるので、余り家の中は、ウロウロしないようにしていました。が、私も裕もやっと治った頃、一番元気で、一度も学校を休んでいなかった詩美が、とうとうインフルエンザにかかってしまいました。その日も元氣いっぱい、朝から、ジャンパーも着ずに、外でローラースケートで遊んでいました。

そして、バレンタインデーに向けて、チョコレシート作りもしていました。

おやつの前に宿題をしていると、「寒い」と鼻水をすすりながら言うので、熱を計ると三十八度ありました。とうとう来てしまった・・・とすぐに休みましたが、今回のインフル

藤本 曜子

エンザは手強く、熱は上がったり下がったりしながら五日も続き、喉が痛み、詩美は何度もボロボロ涙を流していました。三日間学校を休み、元氣になりました。今は大好きな福子ちゃんと一緒に、少し鼻水をすすりながら、お菓子のお家を造っています。

もうすぐ本格的な春です。庭の花壇には、黄色い可愛いクロッカスが咲き始めました。冬に眠っていたからだの一部を思い切り目覚めさせて、エネルギー一杯に新しい季節を迎えたいと思います。



養護メモ 72

だれのためにを・・・？

菅原 哲男

昨年末、日本子どもの虐待防止研究会第3回学術会議が横浜で開催され、全国からの参会者で盛況だった。新しいとり組みや試みなどの紹介もあり手応えのある内容だった。

親と心のケアという事例研究会で養護施設からの報告と提案があった。これは人口五十万以上の都市を対象にした「都市家庭在宅支援事業」という「子ども未来財団」の委託による電話相談の報告であった。

土曜の午前十一時四十五分頃、夫の長期入院と育児に疲れた母親が、子どもに手をあげはじめたら、それがどんどんエスカレートしてしまい、「私は今日の前にいる子どもに包丁を突きつけている。殺そうと思ったが、そちらの電話相談のチラシを思い出しそれで電話をしている。もう、本当に殺しそうだ！」そんな内容の緊迫した電話を受けたという。

その母親が告げた住所はその養護施設の行政区域に隣接する地域で、そこを管轄する児童相談所に電話をしたが土日閉庁で誰も出ない。仕方なく、その施設を管轄する児童相談所に電話をし、折良くそこにいた児

童福祉司が急行して事なきを得た。

しかし、その電話がもう十五分後だったらその児童相談所にも誰もいなくなってしまうていた。あるいは、それが夜や日曜だったりしたら、相談所は無人であり対応は不能である。

養護施設の職員は家庭に関わる法的根拠がないから、それは児童相談所の福祉司などでなければならぬ。それがこのような問題への対応の課題である。そのような発言であった。「そういうことが大変問題なので

すね。」などと今売り出し中のある大学の教授でその会の座長は暢気なコメントをしていた。

聞いているうちに腹が立ってきて会場を出てしまった。狂乱した母親に幼い命が奪われようとしているのだ。そんな緊急の時に何が法的根拠なのだろう。もし、児童相談所が無人の時ならその指導員は「私は何もできないし、そんなことのできる身分ではない」と電話を切ってしまうのだろうか。携帯電話で二十四時間相談サービスが聞いているのである。何とか説得しながらその現場に急行するなどが他

の資源を活用できない場合の対応だろう。何が出来るか出来ないかではない、人間として見過ごしに出来ない事態ではないか。そうでなければやめて欲しいとさえ思うのである。

社会福祉事業が制度化されて驚異的な発展をしてくている。それは大いに慶賀すべきだろう。しかし、制度に取り込まれてしまった民間社会福祉事業の現場はこれほど疲弊しているのである。制度がなければ箸の上げ下ろしさえできないのだろうか。

もともと社会福祉事業は、行き倒れや溺れている子どもなどの困窮した者と現場で出会った者が、見過ごしに出来ずとつさに飛び込むように関わってしまう、人間としての共感に満ちた行為であったのだ。それが、特に戦後の憲法を初めとするあらゆる法などの制定によって漸次制度化されてきたものであり、たかだか五十年ほどの間の出来事なのである。

古から人々は共助の心を培い相互扶助的な『福祉』を担い続け、さらに制度などない時代に文字通り身を挺して『事業』を営んできていた。

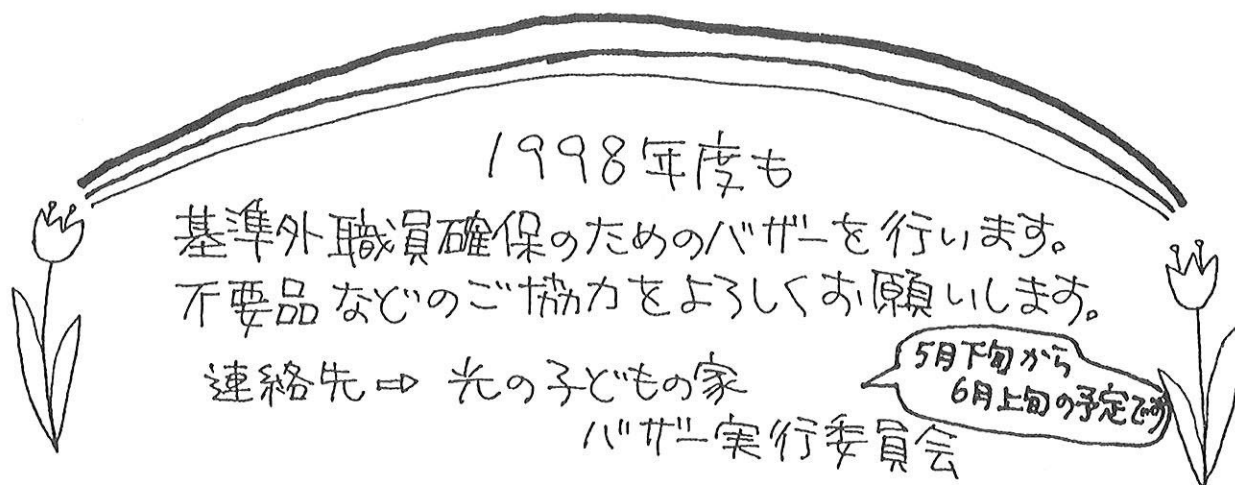
民間社会事業の基本的な意識に、公立ではないという誇りと自負があったのである。

須賀キリスト教社会館長の講演で、民間社会事業の特質は開拓性、先駆性、実験性、批判性であるという指摘に強く感じたことは今も鮮明だ。その民間性の特質の根源である故にお役所仕事の対角に位置する人間性は今どこにあるのだろうか。

今度の五十年ぶりの児童福祉法改正の過程で、養護施設と乳児院にあった年齢制限の取り外しが、規制緩和の流れの中で一度は合意された。しかし、二歳を区切り乳児院と児童養護施設というこれまでのテリトリーを相互に確保して法改正は成った。

養護施設で二歳以下の子どもを知らない子どもたちが、最も弱い者が大切にされ、人は弱く愛すべき存在であることの認識を困難にされて育ち、二歳以下の子どもたちが、八時間労働と週休二日を完全保障されて何にも痛みを感じようもない一人の保母に、四〜六人ほどの見たことはないが天使のようないたいけない赤ちゃんが担当され、我と汝の人格的關係はおろか抱かれての受乳さえ経験できないまま乳児院で暮らす状況は、多分今後五十年は確定したようだ。

そもそも児童福祉施設は、誰のために存在し、何をなすのか？もう一度この働きの原点を尋ね、そこに立ち返って自らの身構えとしたい。



日誌抄 = 暮らしの風景 =

1997年 12月 1日 ▶ 1998年 1月31日

- 12月
7日 第二アドヴェント夕礼拝と夕食会をみんなで
8日 開設の年以来続いている後援会主催の手打ち蕎麦会
8～9日 群馬県子持山学園より職員研修のための見学と情報交換の時 若い人たちのエネルギーを受ける
14日 熱い祈りと共にご支援下さる大宮市のベルアネックス社長小山英子氏より日用品を 感謝
○ 第三アドヴェント クラツのろうそくが三本点る
18日 プロ野球中日ドラゴンズの愛甲猛選手が今年もチャリティゴルフコンペを開催 たくさんのご支援を集めて下さる 菅原施設長が駆けつけて感謝の意を
21日 第4アドヴェント いよいよ！
22日 江森ヘヤーサロンより散髪ご奉仕を今月も 感謝
○ 開設準備の頃からのご支援の里川力共同急配社長が大宮市のスナック『オレンジピール』でチャリティクリスマスパーティを開催 たくさんのご支援を
24日 聖書朗読 讃美 担当者から子どもへ 子どもから担当者へのメッセージのイヴキャンドルサービス サンタさんがプレゼントを眠りに落ちた枕元へ
○ 春日部ジャガー商会よりクリスマスプレゼントを
25日 クリスマス ページェントと祝会を 子どもたちの家族 後援会 教会学校や学校の教師やお友達と 金子嘉男後援会会長 梅沢三保しずくの会会長より

- お年玉をいただく 今年も 感謝
27日 おもちつき 大きくなった子どもたちがベッタン！
31日 今年は数名に激減したお正月帰省
1998年1月
元旦 20名を超える子どもたちと昨夜から泊まりがけの数名の家族 里帰りの卒園者などと一緒に これまでの赦しと導きに感謝し今年の守りと恵と祝福を祈る 元旦礼拝を捧げて今年の第一食を祝いお年玉も
5日 正月帰省などから帰り全員が揃って「お正月気分をぶっ飛ばし 今年もがんばろう会」を 荒巻幸子さんが今年も腹話術のケンちゃんと駆けつけて下さり 和やかに楽しく そして今年の抱負を語り合う
8日 大雪 学校が早く終わり帰った子どもたちに職員も混じって雪合戦！大きな雪だるまも
11日 東大宮教会須田美奈子氏より雛人形を 加須市市川千代子 横村スミ子各氏より日用品をいただく
23日 町内旗井の江森藤男氏より毛布を 栗橋駅前洋菓子のタカラブネよりケーキをたくさん 感謝
26日 東京の田中博正氏よりお菓子をたくさん 感謝
27日 町内のオオタニより野菜をたくさん 感謝
30日 町内旗井のはんだな小城氏より食器を 感謝
おかげさまでこんな風に年を越し新しい年を歩み始めました 今年もよろしくお願いいたします (くら)

/// /// 反 射 光 /// ///

☆昨年末プロ野球中日ドラゴンズ愛甲猛選手のチャリティゴルフコンペで感謝を述べる機会を得た☆選手仲間や芸能界マスコミ関係者など二〇〇名を超える人たちが愛甲選手を中心の和やかで楽しいパーティだった☆甲子園優勝投手という華やかな選手歴などからのイメージとは落差のある落ち着いた好青年の印象だった☆なぜか数年前から私たちを応援して下さる☆開幕目前のシーズンの活躍を心から期待する☆初めてお祝いと慰労のダブルメニューを用意して県立高校合格発表の日を迎えた☆それ程大人も子どもたちも準備を怠って受験十日程前に慌てて合宿様の準備態勢をとった始末☆関わる大人のマイナスも子どもが負いこんで生きていかなければならないことになるのに！☆更に教師は希望校のランクを下げるといったがそれをしていって臨んだのだ☆何の幸運か四名全員が合格した☆準備に最も身の入らなかった子が真顔で「神様ってほんとにいるのかな？」とボツリ☆乞う更なるご支援を！ (哲)